

◎旧朝香宮邸の歴史を訪ねて

連載◆第29回/朝香宮邸—宮家ご家族とその暮らし(前編)

Residence of Prince Asaka 1933—

1933(昭和8)年の竣工当時、朝香宮家は5人家族でした。陸軍中將であり、陸軍大学校で教鞭を取られていた朝香宮鳩彦殿下、宮邸建築に熱心に関わられた允子妃殿下、歩兵第一連隊付きであった第一王子孚彦王、海軍兵学校在学中であった第二王子正彦王、第二王女湛子女王のご家族方が新邸の住人となりました。第一王妃紀久子女王は新邸の完成前、1931(昭和6)年に鍋島侯爵家にすでにご降嫁されていました。

高輪の以前の邸宅は大震災により洋館が壊れ接客部分が不十分であったため、白金台の新邸の1階には重要なお客様をお迎えするために「大広間」、「大客室」、「大食堂」を設け、パブリック・スペースを充実させています。外国大使・

公使を招いたり、また祝い事があると近い親戚である秩父宮、高松宮、三笠宮、東久邇宮、竹田宮、北白川宮等各宮家の方々が賑やかに集まり、「大食堂」で会食後に「大広間」でダンスを楽しまれました。

しかし普段は2階住居部分と1階奥の「小食堂」とを裏の階段で行き来する日々であったそうです。お食事は昼と夜に和食と洋食を交互に繰り返す形で、洋食はフランス料理が中心でした。フランス語の料理本を妃殿下が訳されコックが献立を作りました。ご家族だけの食事でも「ブルー シルブ



図2



図1

レ(バターをください)」など、会話はフランス語でした。朝香宮ご夫妻はフランス滞在経験があり日常会話にはご不自由はありませんでしたが、お子様方や侍女たちにとっては少々苦痛を伴う時間であったようです。食後のひとときは「2階広間」の自動ピアノが奏でるオペラの曲などに耳を傾けたり、また新邸に移られた年の夏の夜は、広間の隣の涼しい「北の間」に集まり、家族団欒の時を過ごされました。庭を見渡せる2階南面「ベランダ」にはご夫妻それぞれの「居間」と「寝室」から出入りができ、熱帯魚とカナリアが飼われていました。允子妃殿下は邸内では洋装にかかとの高い室内ばきというお姿で過ごし、フランスから毎月、手芸の本を取り寄せフランス刺繍や絹刺繍を楽しまれました。しかし新邸建設や引越しのお疲れか、絹の目がよく見えないと眼科医にかかるなど、すでに1933(昭和8)年の春頃からご健康が優れず、5月の竣工からわずか半年後にご家族や各宮様方に見守られて42歳のご生涯を閉じました。新邸完成の喜びもつかの間、殿下と若宮、姫宮4人のお暮らしとなりました。(つづく/高波) ◆

図1.1階大広間(昭和8年竣工時)

図2. 鍋島侯爵家も含む家族記念写真(昭和9年)

前列左から紀久子女王とお子様方、朝香宮鳩彦殿下、湛子女王、後列左から鍋島直泰侯爵、孚彦王、正彦王

図3. 朝香宮允子妃殿下(昭和7、8年頃)



図3

*宮家の暮らしについては、『朝香宮邸のオール・デコ』(1986年 財団法人東京都文化振興会)、『旧朝香宮邸をたずねて』(2001年 社団法人霞会館)及び朝香宮関係者からの聞き取りを参考とした。